

2023年12月17日 アドベントⅢ

説教題「神、我らと共に」イザヤ書7章10～17節

主任牧師 加藤 誠

「それゆえ、わたしの主が御自ら／あなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み／その名をインマヌエルと呼ぶ」(イザヤ書7章14節)

アドベント第三主日は「喜びの灯」を覚えます。主イエスは「喜び」を携えて私たちの間に生きてくださいました。そして一人ひとりの心に「喜びの灯」を灯してくださったのです。それはどのような「喜び」だったのでしょうか？

私たちの周りにはいろいろな「喜び」があふれています。例えば「歓喜」を沸き起こしながら次の瞬間に曇ってしまう「喜び」があります。見えるものに基づいた「喜び」、人びとの称賛による「喜び」、見栄えのよさに基づいた「喜び」はそういうことが多いようです。またある人たちの「喜び」が別の人たちの「嫉妬や憎しみ」を生むことがあります。もともと人間関係に亀裂が入り、対立が生まれているグループ間では「喜び」が共有できない。むしろ新たな火種になりやすいのです。

それに対して、主イエスが携えてきてくださった「喜び」は、ちょっとやそつとでは消えることのない「喜び」です。その人を深く根っここのところから支えてくれる「喜び」です。そして、人と人とをつなげて共に生きる思いを励ましていく「喜び」です。それはどのような「喜び」なのでしょう？

今朝、一緒に開いたのはイザヤの「インマヌエル預言」です。イザヤがこれを語ったのは、北イスラエル王国がアラムと手を組んで南ユダ王国に攻め上り、南ユダのアハズ王と人びとの心が動揺した時のことでした。イザヤは「主なる神にしるしを求めて依り頼め！」と迫りました。しかしアハズ王はその言葉に聞き従わなかったので、近いうちに南ユダの国はアッシリアに滅ぼされることになり、その後で「インマヌエル」と呼ばれるメシアの救いが起こる…とイザヤは語ったのでした。

マタイ福音書は、イエス・キリストこそ、このイザヤの預言を成就し「インマヌエル（神、我らと共にいます）」の神として生まれてくださったことを紹介しました。ですから福音書の最後は、復活された主イエスが「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる！」という宣言で終わっています。

この「インマヌエルの神」イエス・キリストを紹介するのに、マタイ福音書は「系図」から書き始めています。マタイは主イエスが「アブラハムの子（イスラエル民族）」であり「ダビデの子（ダビデ王の血筋）」であることを証明するために系図を書いたと一般には説明されていますが、わたしはそうは思えません。なぜならイエス・キリストは「血筋」を越える「喜びの福音」をあらわされた方だと信じるからです。

イスラエルの人びとは「系図」（血筋）の「正統性」を大切にしました。異邦人の血が混じることを嫌いましたし、祭司とかレビ人のように神殿の働きに就く者たちは

血筋で仕事内容が代々決められていました。特に大祭司の血筋は厳しい資格が求められ、異邦人の血が混じったり、重い病気や障がいのある者がいる家系は「不適格」の烙印が押されたので、実際に「不都合な人たちがいた場合、彼らの存在は「系図」から抹消されました。「存在しなかったこと」にされたのです。「系図」につながる「喜び」は、誰かの尊厳を傷つけ、差別や偏見の悲しみを生み出す「喜び」なのです。

それに対して、マタイ福音書は「系図」から書き始めながらも、イスラエルの人びとが「系図」を重んじたのとはまったく別の価値観がそこにはありました。

マタイは「血統の正当性」においては「不都合な事実」の数々をあえて「系図」に書き込んでいます。「タマル」（3節）は「姦淫によって身ごもった」と汚名を着せられた女性であり、「ラハブ」（5節）は「異邦人の遊女」、「ルツ」（5節）も「異邦人」、そして「ウリヤの妻」（6節）は決して赦されないダビデの罪を想起させる表現です。イスラエルの人びとが「なんと恥ずかしいことか！」と感じ、「なかったことにしたい！」と思う出来事の数々を、マタイは「隠ぺいして正統性を演出する」のではなく、あえて自分たちの傷と汚名に満ちた歩みを想起するように「系図」を示しながら、しかし、そういう「我らと共に」歩んでくださり、これからも共に歩むために来てくださった「インマヌエルの神」を紹介したのです。

つまり、マタイ福音書は、旧約聖書が「神、我らと共に」と語ってきた「我ら」の新しい解釈をこの「系図」で示し、旧約聖書の「我ら」の解釈を大きく乗り越えるイエス・キリストの福音を紹介したのです。「神、我らと共に」という時の「我ら」は、「純血のイスラエルの血筋で正しい信仰を実践してきた我ら」ではなく、「いろいろな民族との血のつながりの中で生かされてきた我ら」であり、「消しがたい過ちを重ねてきた我ら」であること。しかし、その「我ら」を見捨てることなく、共に歩みたもう「インマヌエルの主」の深い慈しみと赦しを覚えて、その神に向かって新しい歩みを始めていこう！…という「福音（喜び）」をマタイは書き著したのです。

その意味で、「純血性」と「正統性」を誇り、他の民族を見下していくような「我ら」ではなく、顔かたちや肌の色や文化が違って、それぞれの個性、歴史を神から与えられた豊かさとして尊重し合う「我ら」でありたいと願います。誰かを戦争で打ち負かし、競争で勝つことで得られる「喜び」ではなく、「あなたが居てくれたよかった！」と、神さまが造られた一人ひとりの存在をうれしく受けていく「喜び」。見えるものや見栄え良いものに一喜一憂する「はかない喜び」ではなく、どんな状況でも決して変わらない神の慈しみに依り頼む「揺らぐことのない喜び」を分かち合っていきたいのです。

そして、いろいろな傷や痛みを抱えたイスラエルの人びとの歴史が「イエス・キリストの恵み」につなげられたように、私たちも、たとえ消しがたい傷や悲しみを抱えていたとしても、一人ひとりの人生が確かに「イエス・キリストの恵み」につなげられていることを喜んでいきましょう。